

【コーディネーター（久世）】続きまして、郡上市は白山文化における岐阜の中心でございますが、「美濃馬場の文化財とその保存活用」ということについて、藤原様より御報告をいただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

## パネリスト

### 「美濃馬場の文化財とその保存活用」

藤原 洋氏(郡上市教育委員会社会教育課)



私からは、「美濃馬場の文化財とその保存活用」ということで、ただいまコーディネーターの久世先生からお話がありましたように、まずは美濃馬場の文化財の保存についてお話ししたいと思います。その中でも、文化財の修理について、行政がやってきた文化財の修理の事例からお話ししたいと思います。難しい話ではないので、気楽に聞いていただければと思います。

岐阜県的美濃馬場は、皆さん御存じのように長瀧と、禅定道沿いの石徹白（いとしろ）、この2つの集落に白山信仰に関する文化財が集中しています。

こちらに写真がありますように、長瀧には白山神社と長瀧寺、阿名院や宝幢坊、経聞坊といった坊中もあります。また、石徹白には白山中居神社や白山の開山の祖の泰澄大師を祭る大師堂などがございます。こういった寺社が、白山信仰に関する文化財を特に多く所蔵されています。

私のほうで美濃馬場に所蔵されている文化財の数を数えてみたところ、美術品だけでも119件ありました。時代としては中世の鎌倉や室町というかなり古い時代のものが多くありました。これらはほとんどが寺社に寄進されたものです。

これまで、合併する前の白鳥町のころから、そのような美術品の修復は行ってきています。最初に修復を行ったのは昭和62年でした。文化財の指定になっているものも未指定のものも合わせると52件修理したという記録があります。このように大変多くの文化財を持っており、特に美術品が多い、というところが美濃馬場の特徴ではないかと思っております。

先ほどお話ししましたように、これから最近の文化財の修理の事例を幾つか紹介したいと思います。





これは、皆さんよく御存じだと思いますが、長瀧の六日祭です。その中の延年です。延年というのは、鎌倉・室町時代にとても栄えた民俗芸能の一つで、特にお寺の僧侶などのねぎらいのために催していたものが、今も白山神社の行事として伝わっています。

私がここで見ていただきたいと思うのは、この2人の当弁という役者です。2人はうぐいす色の狩衣という衣装を着ておりますが、実はこれの大変古いものが残っております。それがこちらです。もう御存じかもしれませんが、2領残っておりまして、今から400年ほど前のものです。背中に元和6年という、墨書銘文が書かれています。これは元和6年に長瀧寺の2人の僧侶が寄進したということや、今の名古屋の住人がこれを縫ったということが書かれています。



左側のものは黄地蝶梅文様繡狩衣といって、黄色地の薄い絹地に梅の周りをチョウが舞っているような文様です。これは全部

刺しゅうしてあります。右側のものは、黄地牡丹文様繡狩衣といって、大柄な牡丹が刺しゅうしてあります。刺しゅうは渡し縫いといって糸を横に渡す縫い方をしています。それによってやわらかく盛り上がったような風合いが出ます。このような大柄な文様やいろいろな色使い、縫い方は、昔の桃山時代の特徴だと言われています。

さて、この狩衣の修復ですが、京都の国立博物館の工房に持ち込みまして、約3年かけて修理を行いました。

まず左上は、狩衣を持ち込んで、全部縫い糸を解体しています。このような形にばらばらにします。

右上は、非常に薄い生地で破れていたり裂けたりしているところがありますので、補修の布を後ろから重ねた場合にどのような感じになるかを試しているところです。縁で黄色い布が少し見えると思いますが、それが補修用の布を当てているところです。



次に左下ですが、これは先ほども紹介した背中裏地に墨書銘文が書かれた部分です。これは、この狩衣の由来を知る非常に重要な部分のため、今回、修理とともに裏地をつけて別に保存しています。

最後に右下ですが、これは蝶梅文様の刺しゅうの部分の拡大です。渡し縫いをしている部分の糸が切れて表に出ている箇所がたくさんありました。それはもう一度中に入れ込むという形で修復しております。



2つ目に紹介するのは、同じく長瀧の白山神社の木造古楽面です。27面と書いていますが、実は最初、国の指定を受けたときは25面でした。あとからあとから2つ面が出てきて、写真は27番目に追加指定した鬼神面です。

これは最近の長瀧の白山神社のででん祭りが5月5日にありますが、そのときの行列に使われていました。右上の写真は、長瀧の白山神社の参道のみこしが渡御する様子

です。この先導役の方が持つ鉾にこの鬼神面がつけてあります。この面は最近までこのような形で使われていました。この面は猿田彦と言われていましたが、もともとは鬼神面ですので、昔は長瀧で能楽とか、猿楽、田楽といった芸能に使われていた面の一つではないかと思われます。これも調べてみると今から4、500年ほど前、室町時代のものでした。

修復としては、左上の面を見ると、縦に3カ所割れています。こういった割れは、祭りのときにもあり、鉄くぎで直されていましたが、それを取り外してもう一度3カ所を竹くぎで接合して、にかわで接着しました。このほかにも虫食いの穴が幾つかありましたが、そのようなところには木屑漆といって漆と木くずをまぜたものを詰め込んだり、樹脂を詰め込んだりして、虫食いの穴を塞いでおります。

3つ目は、石徹白の大師堂の虚空蔵菩薩です。鎌倉時代の初期につくられた仏像です。銅で全部できております。鍍金といって表面を金で塗っています。地元で、一説では奥州の藤原氏がこれを奉納したという言い伝えもあります。

最近になりまして、6枚の蓮弁が見つかりました。右上です。実はこの仏像は、昭和49年、50年と2年かけて修復しております。そ



のときから2カ所の蓮弁が欠失していたという記録があります。それが最近になって、地元の旧家の方が大切に保存されていたことが分かりました。それをいただきまして今回修復をいたしました。

右下は仏像を解体しまして、台座だけにして修復のために京都に持ち込むときの様子です。約半年かけて修復いたしました。

最後です。これは長瀧の長瀧寺の宋版一切経というものです。これも大変貴重な文化財で、今から7、800年前、中国の南宋時代に中国でつくられたものです。現在、長瀧寺で3,752帖の経典が保管されていて、それが全部経箱196箱に入っています。真ん中の黒い箱が漆塗りをした経箱です。これに約20帖ずつ経巻が入っております。1つのお経の厚さによって数は少し違ってきます。いろいろ宋版一切経にも何々版、何々版というのがありまして、これは湖州思溪版というものです。



どれくらいの数があるかという、世界で見ても、中国でつくられたのですが、実は日本に6件、中国に1件しかありません。その中でも前思溪というのがこの長瀧寺のもので、全世界を見てもそういったものを3,000帖以上も持っているのはこの長瀧寺だけという貴重さです。

左下が開いたときの状態なのですが、中はとてもきれいです。保存状態も良いのですが、今まで運び出して修復をしっかりと行っていたことがありませんでしたので、表面はカビの跡とか、虫の食べた跡とか、虫の繭やふん、ネズミなどの動物のふん尿などがついていたり、また明治時代に長瀧は火災に遭っていますので、そのときに若干炭化していたりしていたものもありました。

右の真ん中の写真では左手に黒い棒を持っていますが、これは吸引器です。今回の修復では、付着物をはけや吸引器で取るという作業を行いました。

右下は経箱ですが、幾つかへりが欠失していて外気が入るようになっていました。この経箱のおかげでお経がかなり守られていましたので、今回、この経箱も一部補修しました。

事例は以上ですが、私は文化財の担当でいろいろな方と関わっておりまして、どこの地域も一緒だと思いますが、このように文化財を守るお寺さんとか地元の方の苦労は大変なものだと思います。特に最近では人口減少とか高齢化によってますます大変な状況になってきています。今後はこのような文化財を地域だけでなく地域の外の方も、また我々行政も一緒になって守っていく仕組みづくりが大事なのではないかと思います。以上です。(拍手)